

海外研修（ベトナム） 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 鵜飼 亜咲美

この度、2018/8/16～2018/8/25 にベトナムで行われた海外研修に参加しましたので、報告致します。

主な研修内容は、ハノイで開かれた学会への参加、ホーチミンにあるチョーライ病院での研修および現地学生との交流である。これらを通して異国文化に触れ、また、ベトナムにおける医療や診療放射線技師の役割を学んだ。今年の参加学生は14人と過去3年で最多であった。

2018/8/16(木)

Moving day from Kansai airport to Hanoi

関西空港から5時間のフライトを経てハノイ空港へ。機内の映画の字幕対応がベトナム語のみであり、いささか残念であった。到着ロビーには、VART 関係者の方々が出迎えに来てくださった。空港からホテルまでバスで1時間ほど移動。チェックインを済ませた後、しばしの休憩を挟み夕食へ。夕食は、翌日からの学会に参加される日本の技師の方々と共に、地元のレストランに連れて行っていただいた。香辛料や香草が多く使われており、日本ではあまりない風味のものも多かったが、香りのものを好む私は美味しくいただけた。夜、シャワーを浴びていると突然冷水しか出なくなった。調べると、ベトナムではお湯の供給にお湯タンクというものが用いられているらしく、タンク内のお湯を使い切ったため冷水シャワーになったと考えられる。20日以降のホテルでも同様のことがあったらしく、星付きでもサービスの安定性にやや欠けるようである。



▲ハノイ空港にてVNRT,日本の技師の方々と



▲レストランにて日本の技師の方々と



▲ハロン湾ツアー

2018/8/17(金)

A.M. Ha Long Bay tour

ハロン湾はベトナム北部に位する非常に広大な湾で、1600もの島々や奇岩が存在する。その景色は海の桂林ともよばれ、世界自然遺産に指定されている。

人気の観光地ということもあり、ルーザーや観光客の姿が多く見られた。松島のようなものだろうと思っていたが、それをはるかに上回るスケールは圧巻であった。特徴的な形をした島や岩には、犬やゴリラ、番の鶏などの名前が付けられていた。途中、ティエンクン洞という鍾乳洞がある島に立ち寄った。鍾乳洞の中は冷んやりとはしておらず蒸し暑かった。カラフルなライトアップが有名ならしいが、今回は白色灯のみのライトアップであったのが些か残念である。ハロン湾の奇岩と同様、特徴的な形をした石筍には、ネズミや亀、ゴジラなどの名前が付けられていた。どうも動物に例えるのが好きなようである。

昼食は、日本の技師の方とご一緒させていただき、学生時代や就職のことなど様々なお話を聞かせていただいた。料理も、エビやカニ、貝などシーフードがふんだんに使われており非常に美味しかった。

P.M. Gala dinner

フォーマルウェアで参加するようにといわれていたが、ポロシャツにハーフパンツの方がいるなど存外カジュアルなパーティであった。多くの方が参加されており、会場外のフロアまでテーブルが設けられるほどであった。現地の学生や20日から研修させていただくチョーライ病院の技師の方々も参加されており、私たちのテーブルまで出向いてくださった。非常にフレンドリーな方々であった。歌や踊り等の催しが絶え間なく続き、非常に華やかかつ賑やかであった。最後には日本人参加者による歌のステージが恒例となっているらしく、Như có Bác Hồ trong ngày vui đại thắng というベトナムの英雄であるホーチミン氏を讃える歌を歌った。

2018/8/18(土)

VART conference, Moving to Ho Chi Minh City

ハノイ市の JW Marriott Hotel Hanoi で開催された The 6th Vietnamese Annual Conference of Radiological Technologist に参加した。小規模なものではあったが、アジアを中心に16の国や地域の方々が参加していた。プレゼンは英語とベトナム語で行われていたこともあり、正直、よく分からない点が多くあった。しかしながら、大学で習ったことが取り上げられた発表もあり、まるでわからないというわけではなかった。機器展示では、CANONのブースで超音



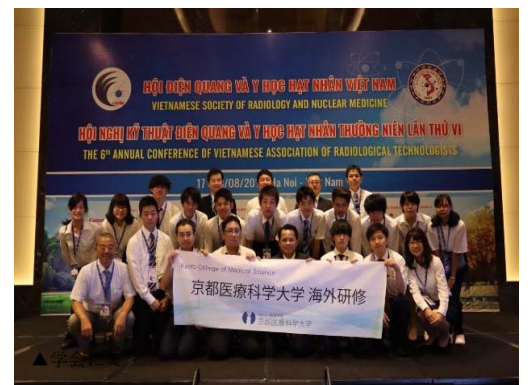
▲ティエンクン鍾乳洞



▲Gala dinner



▲Gala dinner にてベトナムの学生と



▲機器展示にてデモの体験

波装置のデモを体験させていただいた。カラードップラやパルスドップラなどについて教えていただいた。スケジュールの都合上途中までの参加であったが、充実した時間を過ごすことができた。

夕食の後、ハノイ空港から2時間のフライトを経てサイゴン空港へ。

2018/8/19(日)

Free time

ホーチミンは、行政や経済、観光の中心地として栄えるベトナム最大の都市である。その中でも更に中心エリアであり、主要な観光スポットを多く有する1区を訪れた。中央郵便局やサイゴン大教会、ホーチミン市庁舎、ドンコイ通り等様々なスポットを巡り、観光やグルメ、ショッピングを満喫した。街並みは、フランス植民地時代の西洋風建築と現代家屋が入り混じる特徴的なものであった。途中、スクールやタクシーがつかまらないアクシデントがあるも、お店の方や通りすがりの方の優しさに助けられ事なきを得た。



▲サイゴン大教会にて

2018/8/20(月)

A. M. Cho Ray Hospital orientation

チョーライ病院は、ベトナム最大規模の病院である。1900年にL'hopital Municipal de Cho Lonとして設立され、1975年にチョーライ病院と名付けられた。放射線科のスタッフは、医師27人、RT64人、看護師・事務員11人である。1日の検査件数は、一般2500件、マンモ25件、BD20件、CT600件、MRI250件、DSA25件と非常に多い。今回の研修には含まれていなかったが、治療やRIも盛んに行われているようである。

施設内を案内された際、まず驚いたのが人の多さである。受付や通路は患者やその付添いの方で溢れており、人ひとり通るのがやっとというようなスペースもあった。他にも日本とは異なる点が様々見受けられた。以下にその一部を挙げる。現地の方にとって医療費はまだ高額らしく、一部には支払いが不可能な方もいるため、医療費は前払いの制度がとられていた。電子カルテが導入されておらずPACSの保存容量も十分でないらしく、データはCDRに保存され、読影には主にフィルムが用いられていた。外来患者の場合、その日の診療を受けた後、フィルムは患者が持ち帰り自宅にて保存し、次回の受診の際に持参してもらい新しい画像と比較をするらしい。人が多いためか、待合いが操作室内に設けられており、検査の様子や画像などが他の患者から見える状態になっていた。”なんでも写真撮っていいよ”といわれたこともあり、プライバシー管理に関する日本との認識の違いを感じた。



▲チョーライ病院内の様子



▲一般撮影検査風景

P.M. Hospital training: X-ray, Mammo

一般撮影の検査室は複数ヶ所にあり、胸部のみや外来患者のみ等の割振りがされていた。私たちが見させていただいたのは一般撮影全般とマンモを行うメインの場所であった。患者数が多いときは2つある検査室を男女で区別して使うらしい。午後は患者数が比較的小さいようで、使い分けはされていなかった。一人当たりの検査にかかる時間を短縮するため、部位によらず照射野は常に最大で撮影していた。患者が体位を保持することが困難な場合、技師ではなく患者の付添い(主に家族)が補助を行っていた。その際、プロテクタは用いられず、mAs値を小さくすることで補助者の被ばくを抑えていた。

マンモは、女性技師のみが担当していた。女性技師は2人のみのため業務がかなり限定されそうである。この日はCRからDRへの移行日であったため、数件の検査のみであった。検査に日本との大きな差異は見受けられなかった。

2018/8/21(火)

Hospital training: CT

医師や看護師は常駐しておらず、造影検査の際、注射などはすべて技師が行っていた。ベトナムには技師の免許がないこともあり、実習生が患者の呼出しから照射までの一連の作業を行う場面もみられた。実習生曰く、これが普通とのこと。技師と見紛うほどの堂々とした立ち振舞いと積極性には学ぶものがあつた。かといって同じことをしようとは思わず、私たちはポジショニングのみをさせていただいた。

重症患者の補助などは一般撮影と同様に付添いの方が行っていた。CTは被ばくが多いためか、プロテクターが用いられていた。医療従事者でない方が補助をするため、被ばくに対する関心が薄いのかと思ったが、実際は日本人以上に放射線を恐れているらしい。

2018/2/22(水)

A.M. Hospital training: MR

2年時の実習とは異なり、MRに関する知識をもつての研修であったため、より広い領域に目を注ぐことができた。

検査数が数件と非常に少なかったため、被写体を体験させていただいた。MRの検査を受けるのは初めてであった。ガントリ内は存外狭く、いっそアイマスクを着けてくれた方が狭さが気にならないのではないかと考えた。騒音はほとんど気にならず、寧ろいま動いているんだなと感動した。エマージェンシーコールボタンが見当たらず、有事の際はどのようにして外に伝えればよいのかと些か不安を感じた。磁性体の所持に関する確認は、目に見えるものをザックリとチェックするのみの簡易なものであった。患者のポケットに入っていたキーホルダーがガントリに吸着する場面も見られた。



▲一般撮影室にてベトナムの技師の方と



▲CT検査風景



▲MR研修風景



▲home party

P.M. Welcome party

ウェルカムパーティでは、お土産の梅酒を振舞った。噂に違わず、絶え間なく注がれるアルコールと乾杯の嵐は眼を見張るものがあった。普段から非常にフレンドリーな方が多かったが、お酒の席ではより一層であった。カラオケなど即興の催しもあり、終始賑やかな楽しいものであった。

2018/8/23(木)

Hospital training: CT

21日とは別の、冠動脈造影や生検を行う部屋をみせていただいた。造影剤はシリンジに封入されておらず、瓶から入れ替えるものであった。時間短縮のため、予めインジェクタの容量いっぱいに充填し複数の患者に継続して使われていた。残量が少なくなると継ぎ足して対応していた。冠動脈CT検査では、Caスコアが400を超えると中止され、そのままアンギオに送られるケースもあるらしい。

現地の実習生もあり、合同での研修となった。ベトナムではモダリティごとに3ヶ月間の実習があるらしく、ひと通りの業務を学ぶそう。こちらの実習生も、積極的かつスムーズ動いていた。生検の際は医師のアシストもしており、なんでもできるんだな、と感心した。

夕食は、別病院の技師の方や学生とともに地元のレストランでいただいた。食事の後にはナイトマーケットや人気のカフェなどに連れていってくださった。



▲CT研修風景



▲レストランにてベトナムの技師さん、学生と

2018/8/24(金)

A.M. Hospital training: X-ray, Mammo

20日と同じ場所をみせていただいた。この日は患者数が非常に多かったため、検査室は男女で使い分けられていた。しかし、男性とマンモの待ち合いが同じ空間に設けられていたことは衝撃であった。数をこなすため、淡々とこなす姿は日本人の私から見ると愛想がなく作業色が強いように思えたが、それを気にするひとはいないようであった。時間短縮のためか、ネックレスやブラ等を着けたまま胸部を撮影することもあった。

P.M. Presentation by students, Farewell party

大学の施設やモダリティ、実験等の紹介をした。放射線科の医師や技師、実習生が聴きに集まってくださった。プレゼンが終わると、技師の方が実習生に私たちの紹介した人体ファントムについて説明をされていた。ベトナム語であったためその内容は不明だが、日本とは色々と相違があるようだ。カリキュラムや実習、国試等について、ベトナムとの比較を交えながらの質問を受けた。その後、記念品と修了証の授与を受けて研修を修了した。



▲一般撮影室にてベトナムの技師の方々と



▲修了式

フェアウェルパーティは、ウェルカムパーティと同様に乾杯の嵐であった。心なしか始めよりも距離が縮まったように感じた。先輩と先生方へのサプライズやカラオケ大会などもあり、非常に楽しかった反面、別れの名残惜しさも一入であった。

2018/8/25(土)

Mekong River tour

メコン河は、東南アジア最長の国際河川である。その長さは4000kmを超え、タイやベトナム、カンボジア等の複数の国を跨ぐ。

英語ガイドのクルーズツアーであったため、参加者には様々な国の方がいた。河の水はお世辞にも綺麗とはいえなかったが、栄養豊富で魚たちには嬉しいようである。事実、昼食にでたエレファントイヤーフイッシュもあの水で育ったとは思えないほど美味しかった。ツアーはハイテンポで進み、ハチミツ農園やココナッツキャンディ工場、水上魚市場等の産業施設の見学やメコンデルタの伝統音楽を鑑賞した。



▲メコン河

へビとの戯れや馬車での遊覧、手漕ぎボートでの川下り等も体験した。非常に盛りだくさんのツアーであった。

(謝辞)

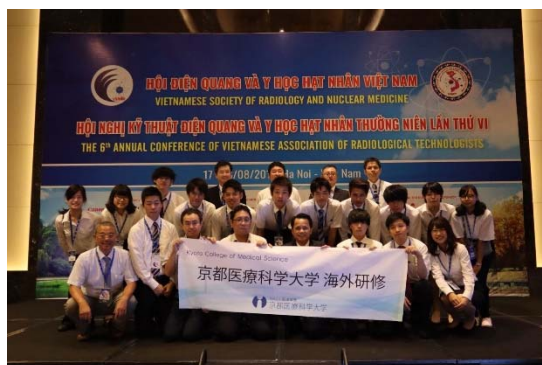
本研修において、終始暖かく見守ってくださった松尾悟教授、水田正芳教授、霜村康平助教に深く感謝いたします。また、お忙しい中、私たちの拙い英語にも懇切丁寧にご指導くださったチョーライ病院の方々にも心より御礼申し上げます。本研修を通して、診療放射線技師という存在について新たな見解を得ることができ、自分の将来像を描くにあたっても非常に有意義な時間となりました。この貴重な経験を活かせるよう今後とも精進していきます。本当にありがとうございました。

海外研修（ベトナム） 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 奥田 響生

学会

学会では、講義で習った内容の応用や最先端の治療についてなど、様々な内容の発表をしていた。多くの方々が英語で発表しており、スライドに英語で訳が書いてあるなど工夫がなされていた。他にも、各々の発表の時間が10分で短い、会場を多数に分けるなどの工夫から、好きな内容の発表だけを聞ける為、無駄がないと思った。発表中、多々英語が聞き取れないことがあった。そこから、今後の課題として英語のリスニング力の強化が挙げられる。



病院実習

病院実習では3つのことを学んだ。

1つ目は患者の多さである。今回自習させて頂いたチョーライ病院は、ベトナムで大きい病院の一つであり、患者さんが多く、一日に2500～3000回、年間約470万回のX線撮影をしている。また、患者の診察の待ち時間も長い。早く診療を受けるため、朝3、4時から病院に並ぶ人も多い。日本では診察の受付時間より1時間前から待っている患者はいるが患者数はベトナムほど多くない。そのためベトナムの診療放射線技師に求められる一番大切なことは、患者さんのX線撮影をいかに効率良くできるかであると考えられた。

2つ目は、技師の業務の範囲である。ベトナムでは技師が造影剤を注射するため、造影には医者が立ち会わない。また看護師が少なく、ベッドで寝ている患者さんは、その患者の家族が付き添い撮影室まで搬送される。そのためCT室やMRI室では、技師が2人1組で患者の入れ替え、ポジショニング、撮影機械の操作、画像の確認、画像フィルムの処理などを行っている。日本ではベトナムより、看護師や医者の数が多いため患者に看護師が付き添い、造影剤は医者が注射する。そのため技師のする仕事が少ないがその分、画像のチェック

を時間かけてしている。法律などの規定が違うため、他職種の人員を増やし業務の分担をすることより、技師の知識を増やし他職種の手伝いをする事で効率、質を上げているのだと思われる。

3つ目は、プライバシーについてである。ベトナムでは一般撮影の時、患者を一度に15人程、捜査室の中に呼び入れる。その際、前の患者のX線画像が安易に見えてしまう。また、胸部とマンモグラフィの撮影室が向かいにあり、それぞれ撮影室に入る患者が向かい合う、または隣に座り待つということがある。日本では患者情報を最低限の他人にしか知られないようにしている。日本と比べてベトナムはプライバシーの保護よりも、多くの患者の撮影をすることを優先していると思った。

これらは、患者の数が多いための方策であるといえる。一日に沢山の患者を診断するためにも、効率良く業務を行うことが大切である。



観光

私たちはハロン湾、ホーチミン、メコン川を観光した。ハロン湾では鍾乳洞、海の桂林と呼ばれる世界自然遺産を観ることができた。広大な湾の中に沢山の岩や島がそそり立ち、神秘的な空間を生み出していた。ホーチミンでは、サイゴン大聖堂、中央郵便局を観に行った。ベトナムは、横断歩道、信号等が少ない。また、バイクがとても多くクラクションが常に鳴り響いていた。メコン河では、大きな船に乗りメコン河やジャングルの中を回った。この河は一見、泥の川に見えるが栄養が豊富でとても良い漁場であるとガイドの方からお聞きした。また、多くの木の実が成っており南国らしいフルーツを頂くことができた。



交流

ベトナムの方々はとてもフレンドリーで、気さくに声をかけて下さる方が多かった。医療の違い、ベトナムの観光地、日本の歴史、コーヒーについてなど様々な会話をした。私は英語を話すことがあまり得意ではなかったが、何度も聞き返し、ゆっくり話して頂くことで、お互いの伝えたいことが理解できた。加えて、サッカーや学会と一緒に参加することで会話だけとは違う交流の楽しさを知った。



まとめ

ベトナムでは沢山のことを学んだが、生まれた場所が違うだけで文化や生活が大きく異なることを深く実感した。また、言葉が100%通じる訳ではないので、単純な感情表現を大切にすべきであると考えた。他にも日本の良いところはもちろん、ベトナムの良いところも多く見つけることができた。英語力、表現の仕方、ベトナムの文化について学んだ上で、また行きたいと思った。



海外研修（ベトナム） 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 寺田 夏穂

私は 8 月 16 日～25 日までの 10 日間、ベトナム研修に参加しました。見るもの全てが刺激的で、非常に良い経験となりました。その内容を報告します。

1. 学会参加

ハワイで行われたベトナム放射線技師会の学術大会に参加させて頂きました。様々な国から技師の方々が参加され、研究結果を発表されていました。発表された方皆さん流暢な英語を話されていて驚きました。発表はすべて英語であったため内容を理解するのは非常に難しく苦勞しました。しかし授業で既に学習した内容に関係した研究もあり、理解できたものもありました。

研究発表が行われていた会場の外では機器展示が開かれており、様々な企業の方がモダリティの説明をされていました。私たちは Canon で超音波の体験をさせて頂きました。患者役、技師役どちらも学生の私たちにさせて頂きました。丁寧に教えて下さり、大学で触れる機会の少なかった超音波について少し理解を深めることができました。



↑ 超音波体験の様子

2. 病院研修

20 日～24 日までの 5 日間、ホーチミンにあるチョーライ病院で研修をさせて頂きました。ベトナムの医療現場は日本と異なる点が非常に多く、驚きの連続でした。私は一般撮影と CT を 2 日ずつ、MRI を 1 日見学させて頂きました。

まず驚いたのは患者さんの多さでした。一般撮影では午前中だけで 200 人もの患者さんを 1 人で撮影すると伺い、それほどの人数に 4 時間ほどで対応するという想像が全くつきませんでした。検査数が多いため回転率をあげるための様々な工夫が凝られていました。午前中は常に人が行き交い技師の先生方の顔も真剣そのものでしたが、午後は検査数も少なく和やかな雰囲気の仕事をされておられ自分も将来このような職場で働きたいと思いました。



↑一般撮影

患者数以外にも衝撃だったことは沢山あります。例えば撮影時に補助が必要な患者さんの場合、技師ではなく患者さんの家族が1人だけ補助のため入室されることです。この時妊婦以外はプロテクターを着用せず、mAs 値を下げて被ばくを抑えるとのこと。また学生の実習の仕方でも全く異なっていました。日本で私が実習に伺ったときは基本的に見学と簡単な患者接遇のみでしたが、ベトナムでは実習生が曝射も注射も行い、技師の先生方は問題があるまでそれを見ているそうです。この実習の仕方であれば就職後の即戦力になることができるだろうと思いました。

病院のシス

テムにおいて一番異なる点は HIS や RIS がないことだと思いました。そのためベトナムの病院ではフィルムが使われていました。撮影した画像をフィルム出力され、それを患者に渡すことで医師に届けられます。それを用いて医師が診察をした後、患者はフィルムと処方された薬を受け取って帰宅します。薬がなくなったら受け取っていたフィルムを持って再度診察を受け、以前の画像と新たな画像を比較し治療効果を確認するそうです。患者さんがフィルムを忘れた場合は CD-R に保存してある画像から探さなくてはならず、やはり電子カルテがないと大変なのだと思います。

3. 現地の方との交流

チョーライ病院での研修期間中は毎日の食事だけでなく、welcome party や farewell party を病院のスタッフの方々と過ごすことができ、とても多くの時間を楽しく過ごすことが出来ました。

welcome party では初めは緊張して上手く話せなかったのですが、乾杯をしている内に冗談を言い皆で笑い合えるほどになっていました。ベトナムの方はとてもフレンドリーだったためより打ち解けられたのだと思います。



↑ welcome party



↑ベトナムの学生との食事の様子

farewell party は最終日だったため序盤から話が盛り上がり、welcome party 以上に多くの技師さんと話をすることが出来ました。チョーライ病院の方々と親しくなれたのも束の間、すぐにお別れとなり、非常に名残惜しかったのですが、握手をし「また来年会おう」と言って頂けたことはとても嬉しかったです。

お昼休みや夜に技師の方に食事に連れて行って頂いたり、向こうの学生と交流したことも非常に印象に残っています。特にベトナムの学生さんは私たちと同年だったため特に刺激を受けました。彼女らはとても英語が上手く流暢に話すため聞き取ることに苦労しましたが、ゆっくり話してくれたりこちらもジェスチャーや翻訳機を用いたりしてコミュニケーションがとれました。お互いが歩み寄れば言葉の壁など関係ないと学ぶことが出来ました。

4. 観光

ハノイ、ホーチミンでは様々な観光地を見ることが出来ました。どこも目新しく興味深いものばかりでした。ハノイでのハロン湾クルーズでは美しいハロン湾と鍾乳洞を見ることが出来ました。



↑ 世界遺産でもあるハロン湾

鍾乳洞→



ホーチミンには様々な観光名所がありました。郵便局では家族や友人にエアメールを送ることが出来ました。5 日後に届いたらしく、そんなに時間がかかるものなのかと驚きました。大聖堂やオペラハウスなど美しい建物も多く見ごたえがありました。ホーチミン像は想像していたより大きく立派で、様々な国の観光客が訪れていました。



↑ ホーチミン像

観光、研修、交流と非常に充実した、また貴重な時間を過ごすことが出来ました。ベトナム海外研修に参加できたことで、自分の視野を広げることが出来ました。この研修で学んだこと、考えさせられたことをこれから先に役立てていきたいと思います。



↑ 大聖堂

海外研修（ベトナム） 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 鉈橋 京介

○ベトナムで感じたこと

初日、ハノイに着き感じたことは独特の臭い、日本よりも多いバイクの交通量と交通規制の緩さである。ヘルメット未着用やバイクの複数人乗車など、日本とはとても異なる雰囲気であった。そのため、日本では経験したことのない海外ならではの雰囲気に初めは圧倒された。今回、ベトナムに来てこの雰囲気を感じれたのは私の中で大きい収穫だと考えている。なぜなら、日本でいつも通り生活していても海外ならではの雰囲気は感じられないからだ。そして、この海外研修を終えて多くの国を周ってみたいと考えられるようになった。多くの異文化やその国ならではの雰囲気を感じられるのは、やはりその国に直接行くことが最も良いからだ。



○学会

学会を終えて感じたことは、英語の重要性である。発表をされた日本の方々は文法はもちろんのこと発音も上手かった。発表の後、質問が来ても相手の言いたいことがわかるリスニング力、質問を聞いた後に頭の中で整理する文法や語彙力、そしてスピーキングの全てを持っていなければあの場に立てないと考えた。そう考えた上でもう一度発表を見てみるとやはり発表をしている人の偉大さを感じた。英語力の重要性を若いうちに感じられたことはすごく良かった。英語の練習をするのに一番良い方法はコミュニケーションである。海外の方と多くのコミュニケーションをとることで英語力が身に付くと気づき、この海外研修の期間内にベトナムの方と積極的にコミュニケーションをとることを試みた。



○病院実習

私達はベトナムの三大病院の一つであるチョーライ病院にて研修を受けた。研修初日、チョーライ病院に着いて患者さんの数が圧倒的に多く、歩くスペースが狭いと感じた。1日に約200人の患者さんを診療する予定で建設されたが、実際には1日に予定の約3倍の約600人であり、歩くスペースが狭いことが理解できた。さらに、ベッド数は約1800床だが、入院患者は2000人を超え、ストレッチャーや床で寝ている患者が存在していると伺った。



病院実習で日本と異なる点は多くあり、その中で私が衝撃を受けたことをいくつか挙げる。1つ目は、診療放射線技師の仕事内容である。日本の診療放射線技師は放射線または超音波を用いた撮影と画像処理と抜針であるが、ベトナムの診療放射線技師は穿刺も行なっていた。両国の診療放射線技師の仕事内容が違ふことは学生の臨床実習にも影響しており、ベトナムでは、日本の国家試験のような資格試験がないため放射線の照射は学生の方でも可能であり、さらに、ベトナムの学生は造影用の点滴針の刺入も行う。ベトナムの学生は専門的な知識や技術を習得するためにとても能動的に実習に取り組んでいた。なぜなら、日本の様に診療放射線技師の教育体制が整っていないため、専門的な知識を学べる環境が少なく、基幹病院であるチョーライ病院で学べる機会が貴重だからである。また、ベトナムでは診療放射線技師は国家資格ではないため、資格試験が行われないので、専門的科目を学ぶ機会も少ないことも彼らが活発的であった一因と考えられる。彼らの実習を見て、就職後どのように行動する必要があるかを考え、積極的かつ集団的に行動していると感じた。就職して最初は、分からないことばかりだと思うので、自分自身で考え、質問するなど積極的な行動が求められる。さらに、ベトナムでは多くの検査をこなさなければならぬため、検査がスムーズに行えるかを考えて行動に移せるように学生同士で声をかけ合っていたように私は感じた。仕事の効率も考えながら自分の業務を果たさなければいけないため、チームワークを特に重視し集団的に行動しているようにも思われた。彼らの置かれた環境を知った後、彼らと無意識に自身を比較するようになった。私は、専門的な知識を容易に学べるため、勉強に対してあまり積極的ではなかった。ベトナムの学生を見ていると見習うべきところが多くあった。私を含めて日本の学生は積極性に少し劣る所がある。私の中で、日本人とベトナム人の違いを多く感じられた大切な期間となった。

海外研修（ベトナム） 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 西田 穰

【学会参加】

私たちはハノイで行われた the 6th Annual Conference of Vietnamese Association of Radiological Technologists に参加した。私にとって初めての学会参加である。学会のイメージはとても堅苦しいものだったが、そこまで格式ばったものではなかった。会場の外では眠気覚ましのコーヒーやクッキーなどがおかれており驚いた。発表の内容は聞いたこともない小難しいものばかりだとおもっていたが、私たちが講義で習った内容に関する発表などもされており一気に緊張が解けた。発表は基本的に英語で行われていた。ベトナムや日本だけでなく中国など様々な国の方が英語を話す様を見て、日本には英語を話せる方が少ないことを痛感した。私たちと年の変わらない大学生が流暢な英語で話す様はとても凛々しく、同世代とは思えないほど、大人びてみえた。同世代の技師を目指している学生が学会に出ていることは衝撃で、自身がとても小さく感じた。

学会の会場では、マンモグラフィやCT など様々な医療機器の展示が行われていた。お昼の休憩の際に前日のガラディナーで仲良くなったハノイの学生に連れられいろいろな機器展示を見てまわり、触れさせてもらった。現地の学生の学ぶ姿勢や探求心には目をみはるものがあった。私も負けてられないと思った。



【病院実習】

8月20日から24日の5日間、チョーライ病院で実習を受けた。日本とベトナムでこれほど違いがあるとは思わなかった。まず、人の多さが異常である。日本とは比べ物にならない。しかし、ほとんどが患者の家族で実際の患者の数はその三分の一だと聞いた。人が多すぎるあまり重症患者や急いでいる患者、ストレッチャーがなかなか通ることができていなかった。

一般撮影では一日に400人もの患者を撮影すると聞き、驚愕した。日本の病院とは忙しさの質が違うように思えた。胸部など簡単な撮影の際にはフィルムを用いていた。いちいちフィルムを届ける必要があるので大変に感じた。そのため、スピード・効率を重視している傾向がみられた。胸部や頭部の撮影を行う際に患者にあわせて照射野を変えることはせず撮影を行っていた。また、検査室にまだ他の患者がいるにも関わらず撮影を行っている様を見ました。その光景を見た私は、チョーライ病院では多少の被ばくは気にしていないのだと考えた。

CT、MRIの造影検査の際、日本では医師が注射をする必要がありますが、ベトナムでは技師が注射をすることができ、わざわざ医師を呼ぶ必要がない。これにより、効率よく検査をすることができる。

日本とは全く違った医療の現場をみることができ、とても面白く勉強になった。また、2年生で習ったことなどを実際に見て触れて復習することによりさらにいい勉強になった。



【異文化】

ベトナムに着いて感じた最初の印象はバイクの多さである。ベトナムでは車はとても高価なもので、バイクが主流となっている。道いっぱいにバイクや車が走っている様は日本では見られず、少し怖いものだった。歩道はあるのだが、バイクがとめられていたり、食べ物が売られていたりなどで歩道を歩くことができず、車道を通ることがほとんどであった。

ベトナムの料理はとても美味しいものだった。全てを美味しく食べることは出来なかったが、知らない味を知ることができ面白かった。私が一番美味しく感じた食べ物はフォーである。ハノイやホーチミンのホテルやさまざまなところで食べたが全て美味しかった。印象的な食べ物は山羊肉だ。「日本では食べることができない」と聞きどうしても食べてみたい料理であった。初めて食べたが獣臭がすごかった。しかし、味はとても美味しくしっかりとした味を楽しむことができた。

【観光】

観光はハロン湾、メコン川などを見てまわった。ハロン湾ではクルーザーに乗り、船の上からハロン湾を満喫した。世界遺産の岩々は神々しいものでベトナムを守っているように感じた。ハロン湾の奥にいくと鍾乳洞があり、長い年月をかけて作られた自然の神秘を目の当たりにした。鍾乳洞は日本では見られないほどの大きさがあり、驚いた。メコン川では船に乗り多くの小さい島々を見てまわった。メコン川周辺の現地の人々の生活を見ることができた。ココナッツを使ったキャンディー、ジュース、お酒などココナッツの用途がここまであるとは思わなかった。

【国際交流】

現地のの人々と交流する機会を与えてくれた大学、両親に私はとても感謝している。現地の人とコミュニケーションをとることでベトナムの方の心の温かさやぬくもりを感じた。ベトナムの方々は英語が苦手な私たちにゆっくりと英語を話してくれたり、携帯を用いて日本語に訳してくれたりなど、積極的にコミュニケーションをとろうとしてくれた。そのおかげで私はたくさんの友達ができ、実習で困っていたら助けてくれたり、自由時間にホーチミンの街を案内してくれたり、帰る前にはお別れを言いに来てくれた。仲良くなりすぎて帰りたくないと思った。みんなとても明るく、いつも楽しそうにしている。日本人にはない生き生きとした姿はとても素晴らしいものであった。

【感想】

この研修を通じて普段とは違う生活、人々に触れることでさまざまな景色を見ることができた。ベトナムならではの考え方や、人々の活気を知ることができた。また、現地の人と仲良くなるにつれて私の英語力のなさを痛感し、悔しかった。この研修に参加して英語の大切さに気づけた。英語をもっと勉強し、みんなともっと話すことが今の目標である。



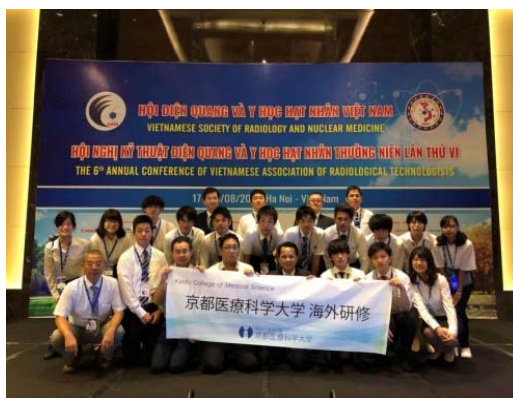
海外研修（ベトナム） 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 長谷 幸己

私は 8 月 16 日から 8 月 26 日のまでベトナムの研修に参加しました。私は長期間の渡航は初めてで不安でしたが、海外での学会参加や病院研修、現地の人との交流など普段はできないとても貴重な体験をすることができました。

< 学会参加 >

私は今回の学会が初めての学会参加でした。学会発表ではベトナム語よりも英語での発表がほとんどであり、先生方が限られた時間で分かりやすく英語で説明されている姿を見て圧倒されました。改めて英語力の大切さを感じ、私も先生方のように海外の発表ができるように努力したいと思いました。学会発表の他にも企業による展示などや交流の場がたくさんありました。



< 病院実習 >



2 年生の時に病院実習を経験しているがベトナムでの病院実習は驚くほど日本と違った。その中でも最も驚いたことは、患者の人数です。日本の病院とは比べものにならない程の患者の多さであり、患者が床で座って待っている光景があたりまえでした。さらに日本の患者よりも重症の患者が多いように感じました。他にも多くの異なる点がありました。例えば、画像の保存方法です。日本はすべてが電子保存であり、撮影をした後に画像を直接 PACS で共有する。一方、ベトナムでは、フィルムとモニターの二種類の診断方法に分

けられる。フィルムの場合は、脳、脊椎に関連した診断が容易であり時間短縮のために用いられる。モニタ診断では、胸部、腹部、その他の部位の診断や造影検査における診断にに使われます。PACS の場合は正確な診断ができる。フィルムではなく PACS を使う理由としては、スライス厚を薄くし、細部まで画像診断が必要な場合、画像枚数と共にデータ量が増えるためである。そして、フィルムは患者さんが医師に直接渡すが、PACS は自動的に画像保存されそれを医師が見る。チョーライ病院の PACS は3 か月しか保存することができないらしく CD にデータを保存するのが一般的でした。このようにベトナムでは日本とは違う効率化が工夫されており驚愕した。他にもたくさんの驚きや学びがありこの病院実習はとても貴重な体験だった。初めての海外での病院実習はとても不安でしたが、チョーライ病院の技師の方々に病院内の事や画像の事を説明をいただき理解を深めることができました。

<現地の人との交流>

現地の人たちとのコミュニケーションは英語の苦手な私にとってなかなか難しかったが、優しい方々ばかりでとても楽しく、貴重な時間を過ごすことができた。しかし、もっと英語を話せたらもっとたくさん話すことができた、少し残念に思った。チョーライ病院の方々とは、フットサルと一緒にやることもできとてもいい思い出になりました。



コメントの追加 [霧村康平1]: だれが？

海外研修（ベトナム） 報告書

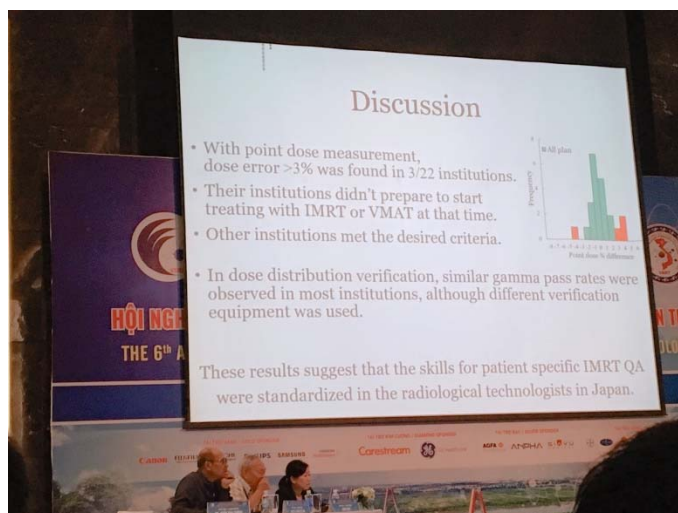
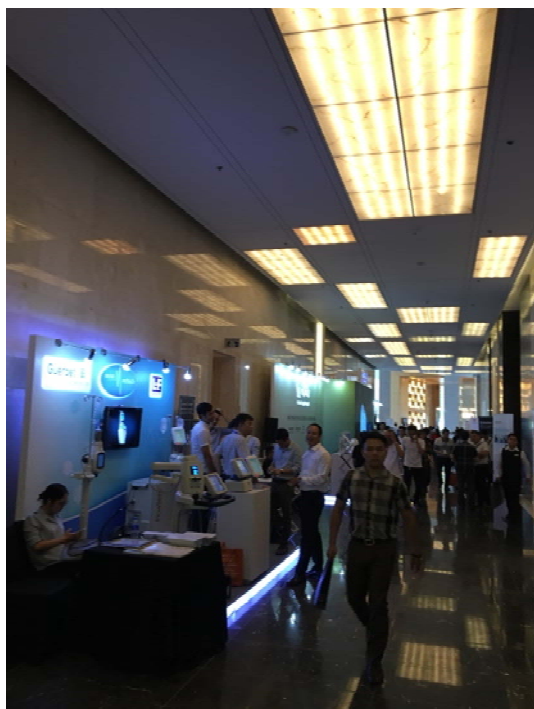
医療科学部 放射線技術学科 3 回生 平川 耕太

私は今回の海外研修に参加して、日本では体験ができないことを経験できた。
学会、病院研修、観光の三つに分けて述べる。

(1) 学会

私は初めて学会に参加した。どのような雰囲気かわからなかったが、参加していい経験になった。海外の学会であるため発表はほとんど英語。ステージ横のスライドでベトナム語表記のスライドであり、ベトナムの参加者が理解できるようになっていた。海外の発表者は海外で発表したという証明になる賞状をもらっていた。この賞状をもらうことも素晴らしいことだが、学会に参加すると海外の研究を見ることができ、それはこれからの自分の研究の糧になる。私も就職してから国内海外問わず様々な学会に参加したいと思った。発表は一人当たり 10 分程度であり、思ったよりも短く、集中して聞くことができた。他にもきっちりすべての発表を聞かなくても自分の興味ある発表のみ聞く方法を取ることができ、これも集中して聞くための工夫だと思った。今回参加したベトナムの学会と、来年参加する日本の学会の違いを比較でき楽しみだ。医療

機器の展示も会場内で行われており、各社の最新の機器を見ることができ、ポータブルや MRI など技師になったら扱える機器ばかりで早く使ってみたいと思った。



(2) 病院研修

ホーチミンのチョーライ病院で病院研修をした。第一印象はとても大きく、迷路のようだった。廊下、ロビーは患者で溢れており、その患者はストレッチャーだけでなく、直接廊下に寝ていたり、日本では見ることのできない光景だった。他にも沢山の日本との違いを見ることができた。ベトナムの最先端の病院でもRISやHISはまだ導入されておらず、画像として他部門に送ることができないのでフィルムが使用されていた。カルテも紙カルテで日本では多くは見ることができないのでいい経験になった。日本は除菌、衛生を重視しているため、台を拭いたり、撮影に使う器具を拭いたりしているがベトナムでは検査と検査の間に台を拭いたりせずCT、MRIでは造影剤も患者ごとに針など変えず薬品も継ぎ足して使っていて、技師が針刺と抜針を自らの手でやっていたことに驚いた。一般撮影ではブラジャーのホックやズボンのファスナーが映ってもそのまま撮り、画像の質よりも患者の回転効率を重視していた。胸部一般撮影をする場合は最大吸気で撮らず、肺野が広く映らない状態でも検像に回していた。どの部門でも操作室と待合室が同じであり、操作している技師の後ろで患者が待っているという不思議な光景だった。



(3) 観光

ハノイでハロン湾ツアー、ホーチミンでメコン川ツアーと市内観光をした。ハロン湾はベトナムの世界遺産で日本では見ることができない景色が広がっていて感動した。ハロン湾は大昔に中国からの進軍を龍が守ったことが由来となっているということを聞くことができた。ホーチミン市街ではインデペンデンスプラザ(大統領官邸)、サイゴン大聖堂、郵便局、ラッキープラザ、パブリックビューイング(サッカー観戦)を巡った。日本とは違う街並みや、建造物がとても印象に残った。最終日はメコン川ツアーに参加した。規模の大きな川や常に泥水の川はなかなか目にすることができないうえに、広大な景色が広がっていて楽しむことができた。



(4) その他・まとめ

上で述べたことの他に、ハノイ、ホーチミンで出会った人たちとの食事会やフットサルの試合など書き切れない程、たくさんの出来事があった。様々な人との出会いや様々な体験など、初の海外だったので忘れられない経験になった。英語は得意ではなかったが、ジェスチャーも交え、何とか乗り越えることができた。いかに伝えようとするかが大切だと学んだ。外国は言葉と文化の壁が原因で行くのを渋っていたが、今回の経験からその壁が無くなったように感じる。またこのように海外に行くチャンスがあれば是非とも参加したい。ベトナムに参加したこの経験を今後につなげ、今回ご尽力いただいた方々に感謝しながら勉強や私生活に生かしていきたいと思っている。



海外研修（ベトナム） 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 平田 藍海

私たちは8月16日から26日まで、学会参加や病院実習を目的に訪越したので報告する。

〔学会参加〕

ベトナムの第20回放射線医学会核医学会議に参加させていただいた。発表は英語で、スライドは英語とベトナム語で用意されていた。英語やベトナム語で説明が行われるため理解できない内容が多かった。しかし、大学の講義などで学んだ基礎的な研究が多く、想像していたよりは内容を理解することができた。また、図や絵などが視覚的にわかりやすく、工夫することの大切さを実感した。



機器展示では、様々な機械が紹介され、Canonのブースでは超音波装置に触れさせていただき、機能について説明いただいた。

〔病院研修〕

ベトナム南部最大の病院であるチョーライ病院で研修させていただいた。一般撮影、CT、MRIの部屋を日替わりで見学した。

一般撮影では一日の撮影数が多く、午前中にたった一台の機械で200枚も撮影すると伺い、日本ではありえない数字に耳を疑った。そのため、照射野は固定、一度に十数人の患者を呼び込み近くで待機してもらうなど、短時間で撮影を行える対策をしていた。

CTでは造影剤のインジェクターが日本のものとは異なり薬剤を機械に入れる必要があった。忙しい職場である為日本で使用されている注射器にセットされているタイプのものがよいと思われた。

MRIでは呼吸で動く身体から診断しやすいような画像を撮るための工夫を学んだ。呼吸同期を機械と写真の二箇所を観測することを知った。



〔その他〕

学会で出会ったベトナムの学生もチョーライ病院で研修を受けていた。そのため、ベトナムの学生の実習内容を知ることができた。彼らは学生であるが、照射ボタンを押し、注射を刺し、患者の画像を編集するなど病院のスタッフと同じように働きながら学んでいた。見ているだけでなく実践して学ぶ環境の違いに驚いた。



学会や病院研修だけでなくベトナムに実際に行くことは食事や習慣など文化の違いに触れられる良い経験になった。

メコン川ツアー、ハロン湾ツアーなどで日本では出会えない食べ物や生き物と触れ合いとても興味深かった。

日本という国での当然であることが、他の国ではそうとは限らない。百聞は一見に如かずという言葉通り、違うと聞いていても実際に過ごしてみると自分の価値観というものがどれほど固まっていたかを実感した。今回の研修旅行に参加したこと
で、今までの考え方を見直す起点となった。また、
個人旅行ではできない貴重な体験が多く、これからの自分の成長につながったと確信した。



ベトナムの学生さんと一緒にご飯を食べに行きました。



海外研修（ベトナム） 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 平野 駿太

・ 行程 (2018/08/16-26)

1 日目	関西国際空港からノイバイ国際空港、ホテルへと移動
2 日目	ハロン湾観光、Gala Dinner
3 日目	学会参加、ホーチミンのホテルへと移動
4 日目	ホーチミン市街観光
5 日目	チョーライ病院施設見学、研修
6-8 日目	病院研修
9 日目	病院研修、プレゼンテーション
10 日目	メコン川観光ツアー
11 日目	タンソンニャット国際空港から関西国際空港へと移動し解散

・ 研修内容

1. 学会 (2018/08/18, ハノイ J.W. マリオットホテル)

Vietnamese Society Of Radiology And Nuclear Medicine Conference への参加及び、
学術発表の聴講。

機器展示での最新医療機器の見学。

2. 病院実習 (2018/08/20-24, チョーライ病院)

一般撮影、CT、MRI の実習。

実習中のベトナム学生との交流。

3. 観光

主にハロン湾、ホーチミン市街、メコン川での観光。

それぞれの観光内容は以下の通りであった。

- ・ ハロン湾：湾内クルージング、鍾乳洞観光
- ・ ホーチミン市街：サイゴン大聖堂、サイゴン郵便局、市街でのショッピング
- ・ メコン川：クルージング、特産品の紹介、バナナ・ココナッツ園見学

・感想

今回のベトナム研修は、初めての海外渡航ということもあり学会や病院実習を通して新たな知識を得ることよりも以下の3点を目的に参加を決意した。

- ・現地の人と積極的に会話することで、英語力の向上を図る。
- ・国際学会の雰囲気や実際の学術発表がどのようなものかを知る。
- ・日本の病院とは異なる点を知り、来年度の病院実習に活かす。

学会はベトナムでの開催ということもあり、英語が母国語の参加者が少なく発表前や発表中は緊張感が感じられた。スライドは全て英語で制作されていたが、箇条書きやグラフを多用するなど工夫がなされていたため研究内容を容易に理解することができた。今回得た相手に伝わりやすい資料作りの方法は、総合研究に活かしていきたい。

病院実習では、質問や会話を英語で行う中で相手に伝わるように表現などを試行錯誤した。そのためか、病院実習を日々重ねていくにつれて、少しずつではあるが実践的な英語力が身についていると感じることができた。また、実習中のベトナム学生との交流ではベトナムと日本の放射線技師の実習内容の違いについて詳しく知ることができた。しかし、実習内容の違いよりも遙かに異なる点は学習意欲の違いであった。ベトナムの学生は日本の学生と異なり、注射針の刺入や機器コンソールの操作などをさせて貰えるようにチャンスがあれば自らに技師の方に頼んでいた。さらに、SNSを交換した学生からは、「将来日本に行きたいので日本語を教えてほしい。」と言われた。このような積極的な態度は、来年度の病院実習で実践していきたい。

観光では、特にメコン川が印象に残った。メコン川は国際河川ということもあり非常に川幅が広く、川岸にはバナナ・ココナツ畑が一面に広がっていた。日本では考えられないような大自然を見ることができた。メコン川ツアーはベトナム以外の国にも、まだまだ見たことのない風景があると感じさせてくれるようなツアーであった。

食文化で感じたことは、ベトナムでは客人をもてなす際は、食べきれないほどの料理を出す習慣があることだ。日本では、食べ残しがあると出した料理が口に合わなかったと認識する。ベトナムでは、料理が足りなかったと認識するようだ。実際、料理を食べきると毎回、お代わりは必要かと質問を受けた。これが、ベトナムで感じた文化の大きな違いであった。

10日間のベトナム研修を通して、先に挙げた3点の目的は以上に記した通り完璧ではないが達成することができたと感じている。しかし、英語力が足りないために伝えたいことを伝えられずもどかしさを感じるものが何度もあった。また、学会などを通して改めて英語の必要性を再確認することができた。

今後は、本研修で感じたコミュニケーションでのもどかしさや英語の必要性、学生の積極的な態度から受けた刺激を糧に英語はもちろんのこと日々の学習に精進していきたい。



海外研修（ベトナム） 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 松本 唯

8 月 16 日～8 月 26 日の 10 日間、海外研修（ベトナム）に参加いたしました。
研修内容は主に、ハノイで開催された学会：THE 6th ANNUAL CONFERENCE OF VIETNAMESE ASSOCIATION OF RADIOLOGICAL TECHNOLOGIST (VART) への参加およびチョーライ病院での 5 日間の実習です。

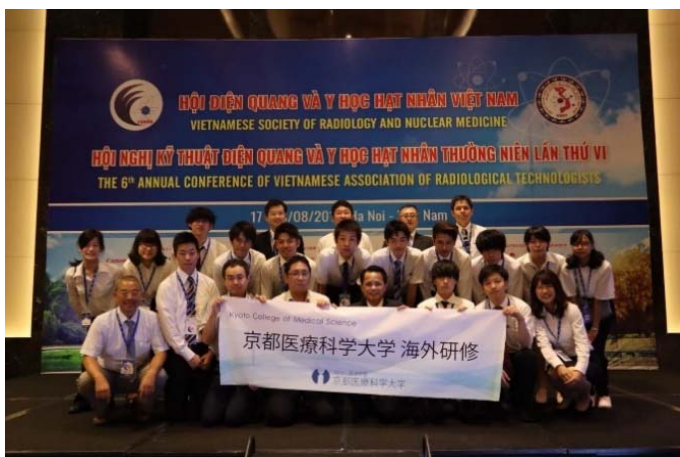
[VART 参加]

初めて参加した学会が今回の国際学会だったため、緊張だけでなく言語の違う異国の地での学会で何を学んで帰れるだろうかと不安でいっぱいでした。

会場に着くと、そこは私が想像したような張り詰めた空間では無く、学生の私でもその場に居やすい雰囲気がありました。Canon, GEhealthcare, PHILIPS, SIEMENS 等、有名メーカーの医療機器の展示も初めて見る事が出来ました。

私は Canon が展示する機械に興味を持ったので実機に触れたり、メーカーの方から機械の説明を受けました。英語でのコミュニケーションだったので不安もありましたが、こうして自ら行動を起こしてみたことで、とても印象に残る経験になりました。

全ての発表には英語のスライドが準備され、これまでの授業で見たことがあるような図があったこと、先生が解説して下さったことで、所々、発表内容を理解することができました。



〔5日間の病院実習〕

チョーライ病院では、私が日本の病院では見たことの無いぐらい多くの人が毎日廊下で診察や検査を待っていました。一般撮影とCTの検査数はそれぞれ日本の病院の約2～3倍はありました。これだけ多くの患者を検査するチョーライ病院では日本と異なる部分が多くあると考え、その点に注目して5日間の実習に取り組みました。

中でも印象的だったのは、一般撮影で照射野を絞らずに撮影していたこと、CT・MRIでは患者ごとに造影剤シリンジを変えずに一度に入るだけの造影剤をシリンジに継ぎ足していたこと、ルートを診療放射線技師がとっていたことです。たくさんの患者を捌くために、どれもとても効率的な方法だと思いました。それと同時に日本はここまで患者数が多くないため、その分あらゆる事態に備えた安全な医療を患者に提供できていると感じました。

またベトナムの診療放射線技師の方々は忙しい中、私たちに多くのことを教えてくださいました。撮影した画像の説明を始め、ベトナムの放射線科のワークフローを順を追って説明してくださり、MRIでの研修では検査が落ち着いた時に実習生同士で撮影もさせて頂くことができました。また、私たちが理解できるまで質問に答え下さり、5日間でたくさん学ぶことができました。



今回ベトナムの病院を訪れるまで、私は日本の医療制度や検査方法しか知らなかったのが国によってそれらがここまで変わることに初めは驚きが隠せませんでした。しかし、最終日に近づくにつれて両国とも自国の患者の特徴に合った方法で検査を行っているため、両国間にこのような違いが生まれたのだと気がつくことができました。今考えてみれば当たり前のことではありますが、ベトナムの医療現場をこの目で実際に見ていなかったら今後その点に思いを馳せることは出来なかったと思います。

〔ベトナムの学生との交流〕

この10日間で現地の学生と積極的に関わることが出来ました。今後も彼らとの繋がりを大切に、いつか先生方の様に診療放射線技師として今よりもっと深いことまで話し合えたり教え合えたりできる関係になればいいなと思います。



最後になりましたが、今回引率して下さった三名の先生方を始め、この研修に関わってくださったすべての方々に深くお礼申し上げます。

海外研修（ベトナム） 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 三宅 啓司

学会（ハノイ）

私は VIETNAMESE SOCIETY OF RADIOLOGY AND NUCLEAR MEDICINE に参加して一番自分に必要と感じたのは英語力である。なぜなら発表は全て英語が使われるからである。目標として学会で発表していた日本の技師のように私も英語で話せるようになりたいと感じた。学会会場では多くの最新のモダリティーが展示されており、賑やかな雰囲気だった。



チョーライ病院実習

チョーライ病院ではとても充実した日々を過ごすことができた。実習初日から驚きの連続だった。例えば患者の人数が日本と比べ物にならないほど多いことや、診察料金の前払いや、すべてが電子カルテでないことフィルムを使っていることなどである。そこから日本が当たり前ではないことを強く感じた。同時に日本の衛生面の良さ、設備や患者待遇



の良さなど日本との違いを多く感じる事ができた。日本とベトナムの技師では、被ばくに対する意識の違いを強く感じた。技術的な面に対して日本の技師との違いはあまり感じなかった。しかし、ベトナムでは、技師が患者に注射をすることができるため、造影剤を用いた CT などの検査では、日本と比較して効率が良





い。一般撮影も CT も MRI も日本とは少しワークフローが異なっていた。一般撮影では患者は十人ぐらいまとめて一旦撮影室に入った後に待合室で待つことになる。そして一日に 300 人以上の患者の写真を撮っていく。胸部写真では自由呼吸下で撮影を行い、ポジショニングと撮影準備に分けて二人の技師で検査を行っていた。患者入れ替えが約 30 秒であったため、その回転率に大変驚いた。実習最終日には私たち学生で事前に練習をしてきた、京都医療科学大学やファントムについてまとめたスピーチを発表した。発表後、技師の方々が多くの質問を下さり、また、我々の発表の解説をベトナム語でしていただいている姿を見て、向上心の強さを感じた。最後は、スタッフの方々から名前入りのマグカップ（写真参照）をいただき、終始親切にしてくだり、チョーライ病院のみなさまに感謝したい。

その他

左の写真は、歓迎会の時の写真である。みんなで歌を歌ったりお酒を飲みあつたりとても楽しい時間であった。チョーライ病院の方々は私たちと脇へだてなく接してくださり、とても楽しくコミュニケーションをとることができた。



右の写真は実習後にチョーライ病院のスタッフのみなさんとフットサルをした時の写真である。やはり、スポーツを通じてチョーライ病院の方々と親睦を深める良いきっかけとなったのが大変良かった。スポーツは世界共通だと強く感じた。



コン川ツアー



Farewell Party



ハロン湾ツアー

まとめ

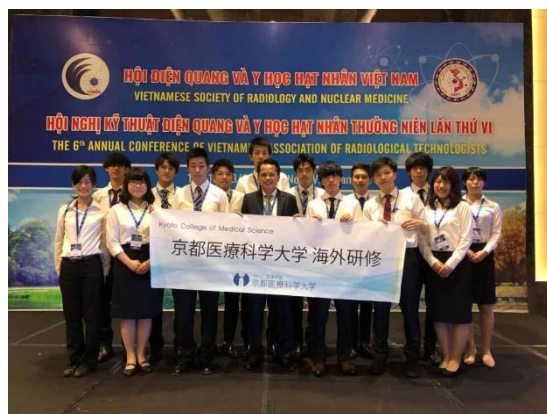
今回のベトナム海外研修では、これからの人生にとってもプラスになる経験をすることができました。このベトナム海外研修に参加できたことを本当にうれしく思います。

少しでもベトナム海外研修を考えている人は勇気を出して是非チャレンジしてください。

海外研修（ベトナム） 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 吉田 崇将

今回の海外研修では、8月16日から26日までベトナムに滞在した。そこで、初めての学会に参加させてもらった。参加者は殆どがベトナム人であると思っていたが、日本人、中国人、韓国人と多くの国の人が参加していた。学術発表では、聞き取れた単語から授業の内容に関することができると分かったが、英語が苦手でほとんど理解はできなかった。現地の学生も参加しており、交流を持つことができた。基本会話は英語のため改めて英語の必要性を感じ、今のうちから少しずつ語彙を増やせるよう努力したいと思った。初めて学会に参加したこともあって少し緊張していたが、いい刺激、いい経験を得ることができた。



8月20日から24日までチョーライ病院で実習をさせてもらった。チョーライ病院の実習では日本との違いを多く感じた。その一つが、患者の多さである。重症患者も多く、廊下は人で溢れかえり、日本では見ない光景だった。就業時間は日本よりも早い16時であり、限られた時間で多くの患者を捌かなければいけない。どこの国も、どこの病院も大体同じようなワークフローなのだと考えていたがベトナムは全く違った。一般では一度に多くの患者を待合室に入室させ撮影していた。そのため、部屋が区切られ女性専用の一般撮影の部屋が存在していた。撮影された写真はすべ

てフィルムに現像して患者に渡していた。しかし、システムの問題上ベトナム語が対応してないため同姓同名の患者が多く一度に多くの患者を撮影した後はフィルムの仕分けが大変だと伺った。CTの研修時には、初めて照射ボタンを押させてもらい日本ではできないとてもいい経験ができた。また、患者に体動がある場合、技師ではなく防護服を着た患者の家族が手伝いをしているのを見て驚いた。今回の研修で一番刺激を受けたのは現地学生の勉強意欲の高さである。現地の学生は実習中ほとんどのことを自分たちで行っており、撮影、患者接遇、穿刺といろいろと考えて行動していた。同じ学生なのにすごい差を感じた。自分はいいい環境で育ちすぎたためハングリー精神が劣っているのだなとも感じた。もっと勉強を頑張ろうと思え、いい刺激を与えてもらえた。

10日間という長いようで短いベトナム研修を通して、文化、言語、日本にいただけでは感じられないようなことに目で見えて、触れ、いろいろと考えさせられた。夜には、先生方とも話すことが多くいろいろと考え、多くを学んだ。自分の中でも多少なりと何かが変わった気がする。また、機会があれば多くの国を訪れ様々な文化に触れたいと思った。これからは、自分に甘えず努力をしようと思えるいい研修だったと心から思える。



海外研修（ベトナム） 報告書

医療科学部 放射線技術学科 4 回生 衣川 直秀

8 月 17 日（金曜日） ベトナム観光

私自身、この海外研修が初ベトナムでした。学会の前日に、日本の診療放射線技師の先生方と一緒にハロン湾観光ツアーへ参加しました。滞在していたホテルからバスで約 4 時間かけて世界遺産であるハロン湾へ向かいました。観光スポットとして有名なハロン湾で船を一隻貸切り、優雅にクルージングを楽しみました。台風の影響もあり、天気はなんとも微妙でしたが、船のデッキで風に吹かれながら時より覗く太陽の光を浴びて、気持ちの良い時間を過ごしました。

船はどんどん進み、ハロン湾にある「天宮洞窟」と呼ばれる鍾乳洞に到着しました。この鍾乳洞も世界遺産に登録されており、多くの観光客が訪れていました。入り口はとても小さく狭い鍾乳洞ですが、中へ進むと大きな空間が広がっており、まさに名前の通りの天宮でした。天井から地面までつながった鍾乳石や滴り落ちる雫に外光が反射し、光り輝く景色は絶景でした。

鍾乳洞の散策で歩き回り、お腹を空かしてクルージング船へと戻ると豪華な昼食が用意されていました。海の幸を中心としたその料理の数々はどれも美味しく、船に揺られながら幸せなひと時を過ごしました。ベトナム料理はあまり日本人の口には合わない聞いていましたが、今回の研修ではどこに行っても美味しい料理を食べることができました。バスの運転手さんや観光ガイドさんをはじめ、ベトナムの人々はとても親切な対応をして下さり、私たちはとても充実した日々を送ることができました。



写真 1. ハロン湾の景色



写真 2. クルージング船で集合写真



写真 3. 豪華な昼食

8月18日（土曜日）

ベトナム放射線学会（VART）への参加

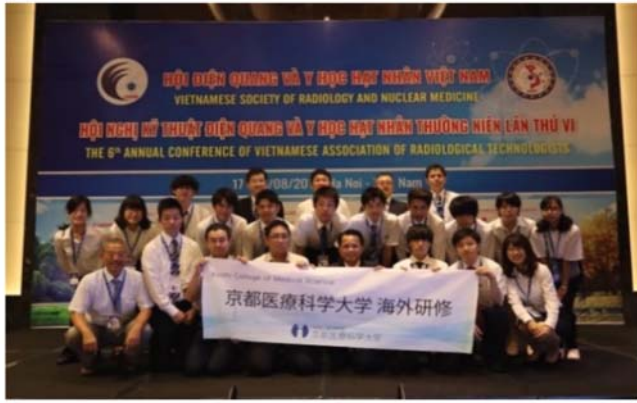


写真 4. 学会で集合写真



写真 5. 木下さんの発表

ベトナムの学会（VART）に参加してきました。日本からも多くの診療放射線技師の先生方が参加され、アジアの医療をリードされている姿がとても印象的でした。日本の学会にも何度か参加したことがあります。専門的な知識・技術に関連する内容が多く、私にとっては難しいものでした。一方 VART での発表内容は、診療における基礎に関するものが多く比較的易しいものでした。大学で培ってきた知識と発表内容を比較することで、自分なりの答えを導き出すことができた大変勉強になりました。

本校の卒業生で現在、芦屋市民病院に勤務されている木下さん、京都府立医大に勤務されている棚田さんが発表されていました。私たちの先輩が、国際学会の舞台上で堂々と英語で発表されている姿は、とてもカッコよく、誇らしい気持ちになりました。診療放射線技師の先生方が活躍されている姿を目の当たりにし、将来、私も海外の学会に参加し発表したいと強く思いました。VART では、参加者が発表後も発表者に対して質問されている姿を数多く見かけました。日本の学会ではあまり見かけることのなかった、常に疑問をもち、自らの成長につなげていく姿勢をみて、英語力はもちろん、積極的に学ぶ姿勢が大切であると痛感しました。

セッションの合間に休憩タイムが設けられており、私たちも現地の学生、診療放射線技師の先生方とお話する機会がありました。私は英語の発音や文法に苦労し、自分の思いを言葉にすることで精一杯でした。一方、ベトナムの方々は私と同じように英語を第二言語として扱うにも関わらず、分かりやすい表現に言い換えたり、身近な例を用いて常に私たちの英語力に合わせる姿勢をとってくれました。日本人の英語を理解しよう、分かりやすく伝えようとするベトナムの方々の姿勢が、私の英語への苦手意識を取り払ってくれました。そのような経験を通じて、コミュニケーションにおいて1番大切なことは、発音や文法なのではなく、相手を理解しようとする気持ちであることを学ぶことができました。

私は、就職試験の関係で1人早く日本に帰国しました。チョーライ病院での研修に参加できなかったことは非常に残念でしたが、ベトナムでの学会に参加させて頂き、現地の学生、診療放射線技師の先生方、などたくさんの方の出会いに恵まれ様々な刺激を受け、大変有意義なベトナム研修になりました。現地でお世話になった診療放射線技師の先生方および、このような貴重な機会をいただいた本校関係者の方々に感謝申し上げます。



写真 6. VART での休憩タイム

海外研修（ベトナム） 報告書

医療科学部 放射線技術学科 4回生 小谷 静也

今回、2度目のベトナム海外研修に参加しました。ハノイで行われた Vietnam Association Radiology Technologist (VART)の学術大会に参加、チョーライ病院での臨床実習、そして、ホーチミン医科薬科大学、フエ医科薬科大学の学生と交流しました。

〔学会参加〕

2日目の夜にガラディナーに参加しました。ここで去年知り合ったホーチミン医科薬科大学、フエ医科薬科大学の学生と再会しました。1年間 SNS で連絡を取っていたので、すぐ去年のように仲良く話すことができ、楽しい時間を過ごせました。

3日目 VART 学会に参加、聴講しました。基礎研究が多いこと、去年より自分の専門知識が増えたこともあり、発表の内容を少し理解できました。日本からは本学卒業生で京都府立医科大学附属病院の棚田さんを初め5名の方が発表されました。京都府立医科大学附属病院での実習中に棚田さんが発表の準備をされているところを拝見しました。原稿を推敲し、発表練習されている姿を見てカッコいいと思いました。そして、本番では素晴らしい発表をされました。このような姿を見て、私も海外の学会で発表したい強く思いました。



写真 1 発表を終えられた棚田さ

〔チョーライ病院実習〕

8月20日から24日までチョーライ病院で臨床実習を行いました。CTやMRIでは検査内容を教えていただいた担当技師の方の英語がとても理解しやすく、臨床実習などカリキュラムの殆どを学んだ4年生にとって、臨床科目の総復習になりました。また、CTやMRIは日本と同じ装置を使用しており、検査の内容も変わらないこと、カルテなどの病院システムが電子化されていないため、患者情報をモダリティに手入力するなど日本と異なるワークフローがあること、去年より具体的に日本の病院と比較すること



写真 2 実習中の様子

ができました。

今回はホーチミン医科薬科大学の学生が実習を行っているところを見学することができました。実習の内容は実際に患者さんを検査して撮影方法などを学ぶものでした。ホーチミン医科薬科大学の3年生が患者さんに穿刺する姿に驚き、実習方法や文化の大きな違いを感じました。

最終日には放射線部の方々の前で本学の施設や設備、学生生活についての紹介をしました。放射線物理の授業数について、臨床実習の期間や内容など、たくさんの質問があり、いい発表になりました。来年は大学のカリキュラムなど、日本ではどのような教育を受けて放射線技師になるのか発表してもらいたいです。

[ベトナムの学生やチョーライ病院のスタッフとの交流]

今年はチョーライ病院のスタッフの方々と我々学生でフットボールの試合をし、たくさん交流することができました。私はチョーライ病院の技師の方のバイクに乗せてもらいました。クラクションの音やベトナムの風を体感できました。そのままホーチミン市を案内してもらったのは最高の思い出です。

ホーチミン医科薬科大学の学生とは、実習後にご飯やカフェに行き、同年代の学生同士で楽しい時間を過ごすことができました。今年、3年生もベトナムの学生やチョーライ病院のスタッフの方々と交流を通して、英語を話すことに積極的になり、去年も参加した私と同じようにベトナムの方との交流を楽しんでくれ、うれしく思いました。



写真3 学生同士で夜ご飯

[感想]

去年と異なり1年先輩として後輩たちと研修に参加しました。先生方も自分にリーダーとして役割を与えてくださり、去年とは少し違う立場で参加しました。途中、3年生をうまくまとめることができるか不安になるときもありましたが、どうすれば私たちにとっていい研修になるのか自分なりに考え、後輩たちの手本となるように努めました。最後には後輩たちからサプライズがあり、達成感と後輩への感謝の気持ちでいっぱいになりました。私は人をまとめることの大変さや役割を果たせたときの達成感をベトナム研修で学ぶことができました。

最後に去年に続き今年もベトナムの海外研修に参加させていただき、国際交流の魅力を知り、自分の視野を

広げ、自分の可能性を感じることができました。学生のうちにこのような経験をでき、本当によかったです。大学でのベトナム研修は私が国際交流したいと思うきっかけになりました。引率して下さった松尾先生、水田先生、霜村先生、たくさんの魅力を教えていただきありがとうございました。



写真4 Welcome partyでの集合写真